

Strix 12 : 85-92 (1993)

春期に西へ渡るハイタカ属 3 種

井上勝巳¹

はじめに

猛禽類の渡りについては近年、秋の渡りを中心に全国的に調査が進められ、ハチクマ *Pernis apivorus* やサシバ *Butastur indicus* については移動ルートや飛来数の概要が明らかにされた(武田 1989, 日本野鳥の会愛媛県支部・高知県支部・大分県支部・宮崎県支部 1989)。その後は四国西部においても継続的に調査が進められ、サシバについては新しいルートの発見などの成果をあげている。四国北部を移動する「山陽ルート」の主流は、従来の定説であった愛媛県北西部の佐田岬半島を経由せず、愛媛県東宇和郡明浜町宮野浦の岩井地区周辺から九州方向へ飛び立つことが確認された(井上 1993)。また、四国南部を移動する「日本列島南岸ルート」の飛び立ちは、愛媛県南宇和郡西海町の高茂岬を中心とした地域に集中することも確認され、さらに詳細な調査が進んでいる。

しかし、春の猛禽類の渡り移動についてはまだ十分に調査が進んでおらず、解明されていない部分が多い。愛媛県西部において春期の渡り調査を進めるうち、春期にもかかわらず西へ移動するオオタカ *Accipiter gentilis*, ツミ *A. gularis*, ハイタカ *A. nisus* の存在が明らかになった。本報では、愛媛県北西部の佐田岬半島先端部において春期に西へ渡るオオタカ, ツミ, ハイタカの調査を行なったので報告する。

調査地および調査方法

調査は愛媛県西宇和郡三崎町の水尻地区で行なった(図1)。佐田岬半島の最先端部に位置する小高い丘陵地(140.8m)で、調査地点はその南東側斜面にあり標高は約115mである。東側の半島部全体と瀬戸内海および宇和海を同時に見とおすことができるため、飛来する個体のほぼ全数を把握でき、渡りの調査には適した場所である。さらに、九州が目視できることから西への渡り確認や、引き返しによる重複個体の除外、また、引き返し個体と東への渡り個体との区別も可能である。

調査は1993年3月9日から4月13日までのあいだに30日間実施した。この期間は1991、1992年の調査でハイタカ属の渡りの時期と推測された時期である。

調査開始時刻は一定していない。7時台の開始が2日間、8時台の開始が12日間、9時台の開始が11日間、10時台の開始が4日間、12時の開始が1日であった。調査終了時刻は天候の変化で飛来の途絶えた3日間を途中中断し、そのほかは17時とした。

調査は、視野を移動するハイタカ属の通過時刻、種名、羽数、移動方向、飛翔高度を記

1993年12月27日受理

1. 日本野鳥の会 愛媛県支部, 〒796 愛媛県八幡浜市谷5-356

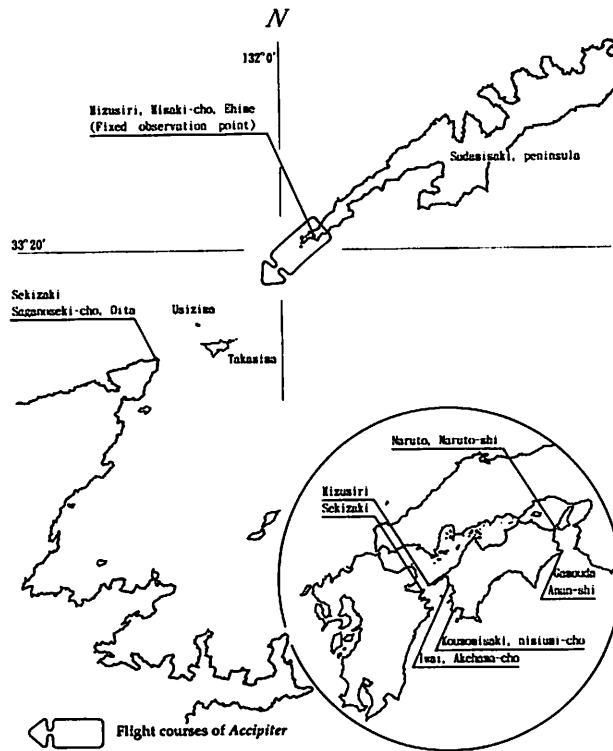


図1. ハイタカ属3種の飛翔コースおよび位置図。

Fig. 1. Observation sites for hawk migration and flight courses of *Accipiter*.

録した。また、羽ばたきの回数や体型、体長の比較、個体の特徴なども記録して種の判定や移動方向特定の参考とした。飛翔高度は以下の5段階に分類し、肉眼で高さを目測した。1：観察地点の水平以下の高さを通じたもの、2：地上から約30m以下の高さのもの、3：地上から30m以上の高さで肉眼で体型がはっきり確認でき、双眼鏡での識別が容易なもの、4：肉眼では小さなシルエットでみえ、双眼鏡でも識別が難しいもの、5：肉眼では点に見えるもの、双眼鏡でやっと発見できたもの。解析には高度区分1および2を低い飛翔、3以上を高い飛翔とした。

渡りと関係の深い気象状況については、天候、雲量、風向、風力、気温について記録し、視界、雲形なども記録した。風力判定にはビューフォート風力階級表をもちい、風力階級を記録した。視界はハイタカ属の移動方向にあたる大分県佐賀関町が、肉眼で確認できる状態を視界良好とした。調査地点からの最短距離は約15kmである。また、移動方向約10km地点にあり、岬先端から最も近い目標物となる高島がまったくみえない状態を視界不良としてその程度を記録した。気象状況は調査開始時の状況と終了時、そのほかは気象変化がみられた時点で新たに記録をした。

なお、春期のハイタカ属渡りの状況は近県の知人に報告するとともに、各地での観察と情報の交換を依頼した。

結果および考察

オオタカ、ツミ、ハイタカの3種が渡っていることを確認した。しかし、調査した大部分の個体について種を明確に識別することは困難だったため種の区別は行わず、ハイタカ属3種として集計した。集計は引き返しによる重複個体を除外し、「西への渡り」と「東への渡り」を区別した。なお、ハイタカ属のタカとサシバ、ノスリなど、ほかのタカ類との識別は容易だった。

1. 西へのハイタカ属の渡り

調査地点の東より飛来して九州方向へ渡りをしたハイタカ属3種は合計2086羽であった。調査期間をとおしてハイタカ属の渡りが記録され、特に3月23日から4月3日にかけて多く記録された(図2)。調査開始の3月9日にすでに36羽の渡りがみられたことは、調査開始以前から渡りがはじまっていたことを示している。また、調査終了時の4月10日から13日にかけてもやや減少傾向を示しながらも、なお80羽程度の飛来が記録されたことは、調査終了後も渡りが続いたことを示している。

本調査地の対岸にあたる大分県佐賀関町関崎では、2月27日にすでにオオタカとハイタカの飛来が記録され、4月下旬にも1日に40羽程度のオオタカ、ハイタカの飛来が記録されている(立川孝之 私信)。これらのことは、本調査地のハイタカ属の渡りがかなり長期間続くことを示している。

渡りの形態は単独か2~3羽であることが多く、ごく短時間に飛来数が多いときも単独で距離をおいての移動が多かった。数羽が次々と飛来して観察点上空で旋回し、まとまることもあったが、サシバのように数十羽が群れて移動する様子は観察されなかった。2羽で飛来するものは体型に明らかな大小差がみられる場合が多く、つがいと推測された。

今後は本調査地の対岸にあたる関崎と合同調査を行ない、移動コースの特定や移動時間の計測など「春期の渡り」の解明を進めたい。

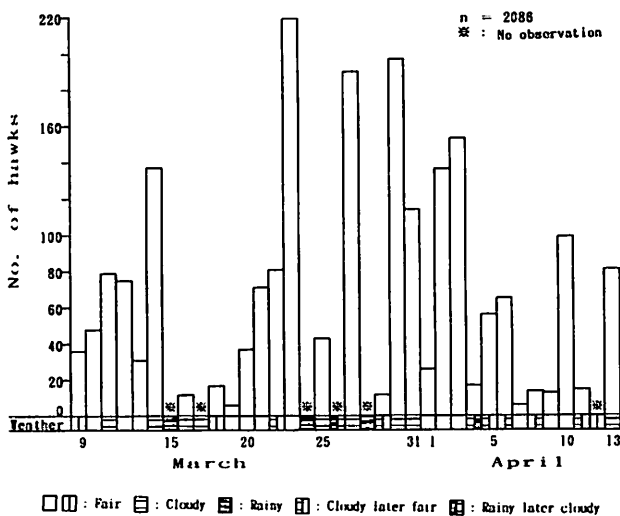


図2. 西へ渡るハイタカ属鳥類の日別飛来数と天候(1993年)。

Fig. 2. Number of migrating *Accipiters* to the west each day, and weather conditions.

2. 東へのハイタカ属の渡り

調査地点の西より飛来して東へ渡りをしたハイタカ属3種は合計93羽であった。東への渡りであることを特定するには、西へ渡る個体の引き返しと区別する必要がある、特に慎重な判断を行なった。東への渡りも西への渡りと同様に調査期間をとおして確認され、特に3月23日から4月2日に多かった(図3)。

最多飛来数の1日12羽、および総数の93羽は秋期に西へ渡る個体数から比較すると極めて少ない数である。この様な傾向はノスリでもみられた(井上 未発表)。東への渡りは調査終了時においても、なお飛来の多い状態が続いていたので(図3)、渡りの中心が4月である可能性もある。

3. 時刻別飛来数の変化

西への渡りについて、飛来数の多い上位8日間の記録を15分ごとに集計して示した(図4)。渡りの大半は10時から15時までのあいだに集中していた。調査開始時刻は7時10分から9時40分と不規則であるが、開始時から10時までの飛来は少なかった。15時以降は飛来が落ちこみ、16時以降はほとんど渡りが止まった。また、15分あたりの最大飛来数は30羽にとどまり、大部分が20羽以下で、大群での移動がないことを示している。

4. 渡りと気象状況について

1) 天候

天候と飛来数の関係では、天候以外の条件は一定で天候のみが異なっていると仮定して解析をした。そのため、渡り個体数の比較的安定するピーク時を選定し、3月23日から4月3日までの12日間について調べた。日中に天候の変化した3月29日については集計から除外した。最も影響をおよぼすと思われる雨天時には、調査は実施していない。晴天4日間の合計534羽と、曇天4日間の合計544羽の差は10羽で、両者のあいだには大きな差はみられなかった。雨天については、曇天から雨天にかわった4月4日に、曇天時にみられた渡りが降雨時には中断した観察例があった。

2) 風力

風力について日別の飛来数を風力階級ごとに示した(図5)。調査期間中、風力0の状

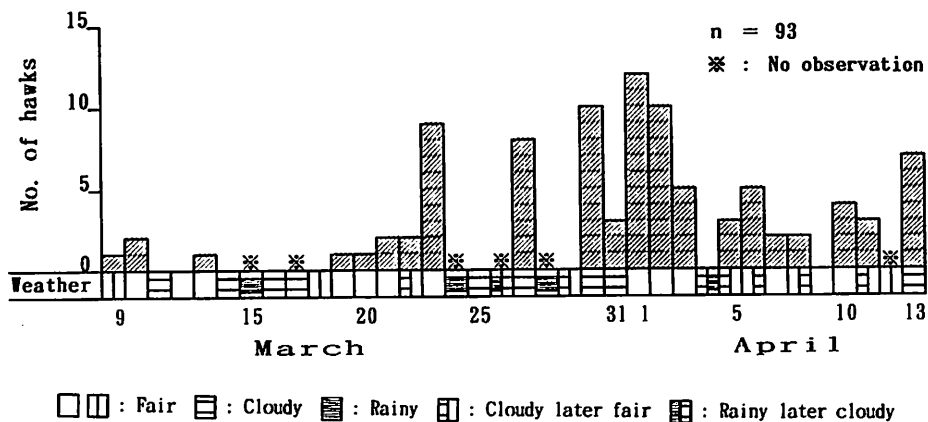


図3. 東へ渡るハイタカ属鳥類の日別飛来数と天候(1993年)。

Fig. 3. Number of migrating *Accipiters* to the east each day, and weather conditions.

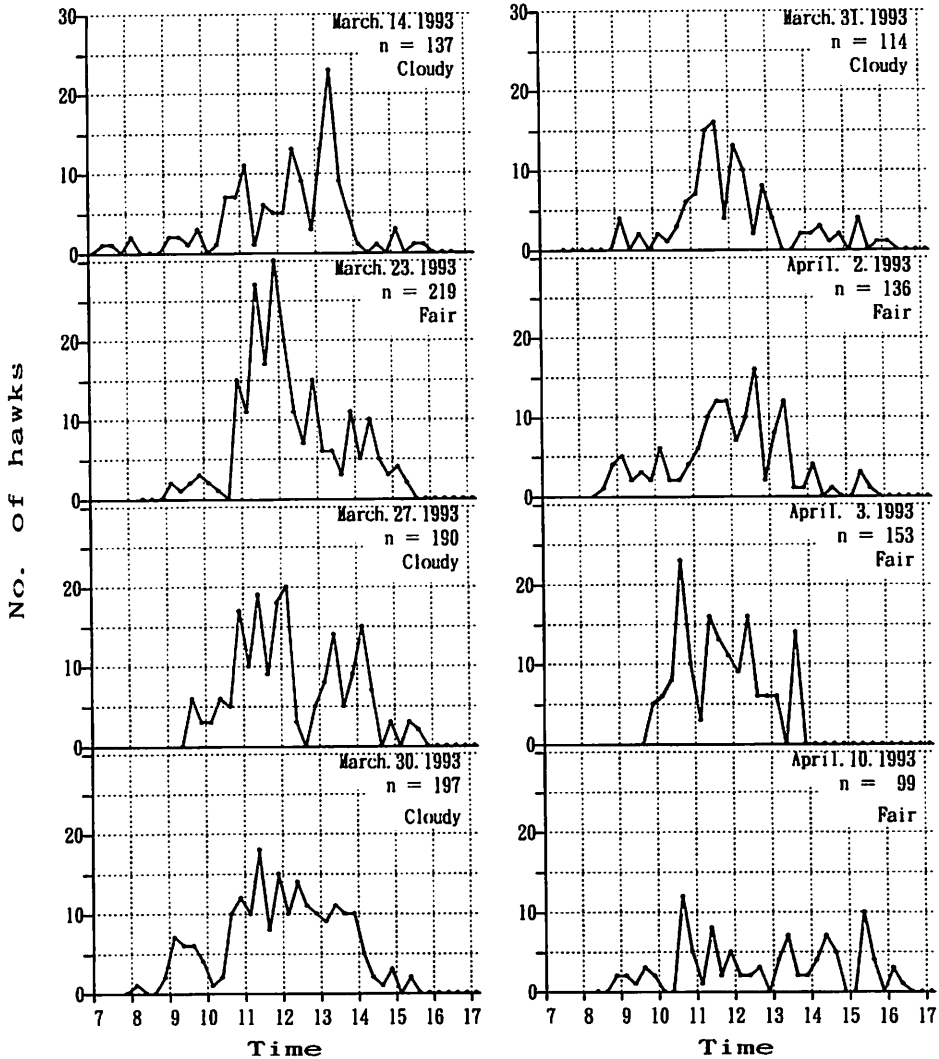


図4. 西へ移動するハイタカ属鳥類の時刻別飛来数 (1993年).

Fig. 4. Daily pattern of migration for 8 days during spring, 1993.

況は観測されなかった。風力3以下の比較的穏やかな風が22日間、風力4以上の強風が8日間記録された。風力2の条件で最も多くの渡りが記録され、風力1および風力3の条件でも飛来数が多い傾向を示した(図5)。風力2以上については風力指数が上昇するに伴い、飛来数が減少する傾向をみせた。

3) 視界

視界に影響を与えたのは海上の霧と黄砂現象によるかすみであった。しかし、そのいずれも調査地点を通過するハイタカ属の調査には影響を与えなかった。不良時における視界は4~6 km程度であった。視界良と不良の2条件が顕著に表れ、かつ飛来数の多い日を選定し日別の飛翔高度割合を示した(図6)。

なお、風力は1~3のあいだであり、天候は晴天と曇天が混在しており、図6の結果は

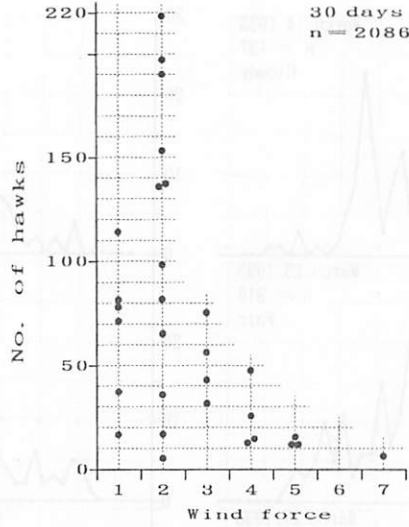


図5. 日別飛来数と風力の関係.

Fig. 5. Relation between number of migrants and wind force.

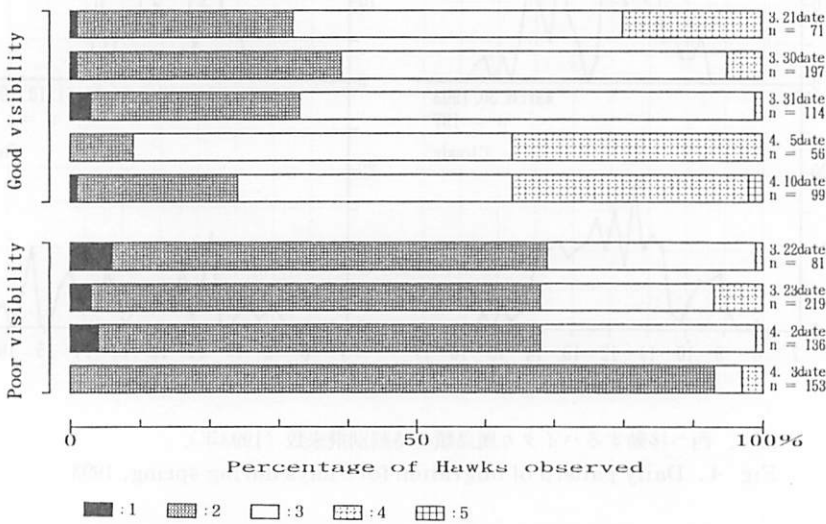


図6. 視界と飛翔高度の関係. 図中の1~5は飛翔高度の階級を表わし, 数字が大きくなるほど高度が高いことを示す.

Fig. 6. Relation between visibility and flight altitude.

これらの要因の影響をあまりうけていないと思われる.

対岸の九州がよく見える視界良好の条件では, 高度区分3以上の高い飛翔が61~91%と多い傾向を示した. それに対して視界不良の条件では, 高度区分2以下の低い飛翔が67.4~92.3%と高い確率を示し, 高度区分4以上の極めて高い飛翔は1.8~6.9%と少なかった.

5. 渡りのルートについて

佐田岬半島の先端部より豊後水道を南西方向に移動するハイタカ属3種は, 高島方向へ

むかった(図1)。その後、大分県佐賀関町関崎付近に至ることは確認されたが、それ以降の移動ルートや行動については不明である。愛媛県内の移動についても佐田岬半島の間地点と基部において、少数の渡りが観察されているのみである。また、佐田岬に飛来する2000羽もの個体が四国内だけのものなのか、あるいは四国以北の本州方面から移動してくる個体があるのかについても不明である。

近県における春期のハイタカ属の西への渡りについては、1992年4月に徳島県鳴門市鳴門公園で2件16羽が確認された(柴折史昭 私信)。また、同地点で1993年3月から4月にかけて3件9羽が確認され、徳島県蒲生田においても4月に1件5羽が確認された(東條秀徳 私信)。これは、ハイタカ属が本州から飛来している可能性を示している。

春の渡りは繁殖地への移動である。しかし、四国以南の国内においてハイタカ属の繁殖や夏期における生息は、少数のツミ以外の記録はないとされる(高野 1980)。大陸ではハイタカ属3種が繁殖していることから(高野 1982)、九州へ移動後は朝鮮半島に渡る可能性がある。

今後この報告をきっかけに調査が進められ、各地の観察が線でつながることを期待する。

謝 辞

徳島県支部の柴折史昭氏と東條秀徳氏および大分県支部の立川孝之氏には、現地の観察記録や渡りの状況を報告していただいた。愛媛県支部の錦織隆氏や塚原和之氏をはじめ会員各位においては、現地調査に参加していただき多くの助言をいただいた。特に丹下一彦氏には調査を一部代行していただくと共に、識別や渡りについて助言、指導をしていただいた。また、佐田岬半島の渡りに詳しい毛利秀生氏と額田寿之氏からは、渡り情報を提供していただいた。これらの方々に感謝の意を表したい。

要 約

佐田岬半島先端部において、春期に西へ移動するオオタカ、ツミ、ハイタカの実態を調査するため、1993年3月9日から4月13日までのあいだに30日間調査を行なった。そして以下のような結果をえた。

1. 東から飛来して西へ移動するオオタカ、ツミ、ハイタカの3種、2086羽を確認した。

また、西より飛来して東へ移動する同種を93羽確認した。

2. 渡りは調査開始日より終了日まで記録された。飛来のピークは3月23日から4月3日にかけて記録され、最多の飛来数は219羽/日であった。大分県関崎では2月下旬と4月下旬の飛来が報告されたことから、渡りは調査期間の前後を含め長期に及ぶものと推察された。

3. 晴天、曇天の天候と飛来数との関連はみられなかった。渡りは穏やかな天候時に多く風が強い時には著しく減少する傾向があった。視界と飛来数の関連はみられなかったが、飛翔高度に影響を与えた。視界が悪いと飛翔高度が低くなる傾向があった。

4. 渡りは10時から15時までに集中し、それ以前と以降については少ない傾向があった。

引用文献

井上勝巳. 1993. 新タカ見ガイド. Birder 7 (10): 18-21.

日本野鳥の会愛媛県支部・高知県支部・大分県支部・宮崎県支部. 1989. 四国から九州に渡るサシバの渡りルート. Strix 8: 125-131.

高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 日本野鳥の会, 東京.

高野伸二. 1982. フィールドガイド 日本の野鳥. 日本野鳥の会, 東京.

武田恵世. 1989. 日本列島におけるタカの渡り. *Strix* 8 : 35 - 123.

Spring *Accipiter* migration in north-west Shikoku

Katsumi Inoue¹

Goshawks *Accipiter gentilis*, Japanese Lesser Sparrow hawks *A. gularis* and Sparrow Hawks *A. nisus* migrating to the west in spring were observed at Sadamisaki peninsula, Shikoku Island, for 30 days from 9 March to 13 April 1993. The main results were as follows.

1. 2086 Accipiters of 3 species, Goshawk, Japanese Lesser Sparrow Hawk and Sparrow Hawk, were observed migrating from the east to the west. We also observed 93 Accipiters migrating from west to east during that same period.
2. The migratory hawks were observed every day during the period, except on rainy days. The peak of migration was from 23 March to 3 April, and the largest number of migrants seen on a day was 219. As Accipiters were reported migrating south-west of our site, in Sekizaki, Oita Prefecture, during late February and early April, a long-duration migration is suggested.
3. Our data showed no relation between fair or cloudy days and the number of migrants. There were a large number of migrants on calm and fine days, and only a few migrants were seen on windy days. There was no close connection between atmospheric visibility and the number of migrants we observed, but visibility had some influence on their flight altitude. When visibility was poor, flight altitude was low.
4. The migratory movements were concentrated from approximately 10 : 00 to 15 : 00, and very few were seen before 10 : 00 and after 15 : 00.

1. Ehime Chapter of the Wild Bird Society of Japan. Tani 5 - 356, Yawatahama-shi, Ehime 796